

Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	9
4	気に入ったわ	10
5	校長先生	12
6	お弁当	15
7	今日から学校に行く	18

Chapter1 初めての駅

自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を引っ張って、改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。

そこで、改札口のおじさんに、「この切符、もらっちゃいけない？」と聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、切符を取り上げた。トットちゃんは、改札口の箱にいっぱい溜まっている切符をさして聞いた。「これ、全部、おじさんの？」おじさんは、他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。「おじさんのじゃないよ、駅のだから」「へーえ……」トットちゃんは、未練がましく、箱を覗き込みながら言った。「私、大人になったら、切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、一緒にやるといいよ」

トットちゃんは、少し離れて、おじさんを見た。おじさんは肥っていて、眼鏡をかけていて、よく見ると、やさしそうなところもあった。「ふん……」トットちゃんは、手を腰に当てて、観察しながら言った。「おじさんとこの子と、一緒にやってもいいけど、考えとくわ。あたし、これから新しい学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、待ってるママのところに走っていった。そして、こう叫んだ。「私、切符屋さんになろうと思うんだ！」ママは、驚きもしないで、いった。「でも、スパイになるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに手を取られて歩き出しながら、考えた。(そうだよ。昨日までは、絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまの切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)「そうだ！」トットちゃんは、いいことを思いついて、ママの顔をのぞきながら、大声をはりあげていった。「ねえ、本当はスパイなんだけど、切符屋さんなのは、どう？」ママは答えなかった。

本当のことを言うと、ママはとても不安だったのだ。もし、これから行く小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。小さい花のついた、フェ

ルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分と言った。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校^{がっこう}の門^{もん}をくぐる前^{まえ}に、トットちゃん^{ねん}のママが、なぜ不安^{ふあん}なのかを説明^{せつめい}すると、それはトットちゃんが、小学校^{しょうがっこう}一年^{ねん}なのにかかわらず、すでに学校^{がっこう}を退学^{たいがく}になったからだった。一年生^{いちねんせい}で!!

つい先週^{せんしゅう}のことだった。ママはトットちゃん^{ねん}の担任^{たんになん}の先生^{せんせい}に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんがいると、クラス^{じゅう}中の迷惑^{めいわく}になります。よその学校^{がっこう}にお連れください!」若くて美しい女^{わか うつく おんな}の先生^{せんせい}は、ため息^{いき}をつきながら、繰り返した。「本当に困^{こま}ってるんです!」ママはびっくりした。(一体^{いったい}、どんなことを……。クラス^{じゅう}中の迷惑^{めいわく}になる、どんなことを、あの子^こがするんだろうか……)

先生^{せんせい}は、カールしたまつ毛^げをパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻^{みじか うちまき}の毛^けを手でなでながら説明^{せつめい}に取り掛^とかった。

「まず、授業^{じゅぎょう}中に、机^{つくえ}のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私^{わたし}が、用事^{ようじ}がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申^{もう}しますと、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、ノートから、筆箱^{ふでばこ}、教科書^{きょうかしょ}、全部^{ぜんぶ}を机^{つくえ}の中にしまっ^{なか}てしまっ^なて、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取り^{かきと}をするとしますね。するとお嬢^{じょう}さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭^あを中^{あた}につっこんで筆箱^{ふでばこ}から“ア”を書^かくための鉛筆^{えんぴつ}を出すと、急いで閉めて、“ア”を書^かきます。ところが、うまく書けなかったり間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭^あを突^{あた}っ込んで、消しゴム^{け ごむ}をだし、閉めると、急いで消しゴム^{け ごむ}を使い、次に、すごい早^{はや}さで開けて、消しゴム^{け ごむ}をしまっ^して、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、“ア”ひとつだけ書^かいて、道具^{どうぐ}をひとつひとつ、全部^{ぜんぶ}しまっ^{えんぴつ}うんです。鉛筆^{えんぴつ}をしまい、閉めて、また開けてノート^しをしまい……というふう^{つぎ}に。そして、次の“イ”のときに、また、ノートから始^{はじ}まって、鉛筆^{えんぴつ}、消しゴム^{け ごむ}……その度^{たび}に、私^{わたし}の目^めの前^{まえ}で、目まぐるしく、机^{つくえ}のフタ^{ひら}が開^しいたり閉^{わたし}まったり。私^{わたし}、目^めが回^{まわ}るんです。でも、一応^{いちおう}、用事^{ようじ}があるんですから、

いけないとは申せませんが……」先生のまつ毛が、その時を思い出したように、パチパチと早くなった。

そこで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行き帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだ。「ねえ、学校って、すごい。家の机の引き出しは、こんな風に、引っ張るのだけど、学校のはフタが上にあがる。ゴミ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！」ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう)と考えたけど、先生には、「よく注意しますから」といった。ところが、先生には、それまでの調子より声をもうすこし高くして、こういった。「それだけなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところですよ！」ママは、わけが分からないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえ、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いてる人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたか

ら教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始める。クラスネットや鉦や太鼓や、三味線で。その間、先生がどうしてるか、といえ
ば、一段落つくまで、ひとり教壇で、ジーっと待ってるしかない。(この一曲が終わるまでの辛抱なんだから)と自分に言い聞かせながら。

さて、一曲終わると、チンドン屋さんは去って行き、生徒たちは、それぞれの席にもどる。ところが、驚いたことに、トットちゃんは、窓のところから動かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生の問いに、トットちゃんは、大真面目に答えた。「だって、また違うチンドン屋さんが来たら、お話しなきゃならないし。それから、さっきのチンドン屋さんが、また、戻ってきたら、大変だからです。」

「これじゃ、授業にならない、ということが、おわかりでしょう？」話してるうちに、先生は、かなり感情的になってきて、ママに言った。ママは、(なるほど、これでは先生も、お困りだわ)と思いかけた。とたん、先生は、また一段と大きな声で、こういった。「それに……」ママはびっくりしながらも、情けない思い出先生に聞いた。「まだ、あるんでございましょうか……」先生は、すぐいった。「“まだ”というように、数えられるくらいなら、こうやって、やめていただきたい、とお願いはしません!!」それから先生は、少し息を静めて、ママの顔を見て言った。「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのも、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、『何してるの?』と、誰かに、何かを聞いているんですね。相手は、私のほうから見えませんが、誰だろう、と思っておりますと、また大きな声で、『ねえ、何をしてるの?』って。それも、今度は、通りにでなく、上のほうに向かって聞いてるんです。私も気になりまして、相手の返事が聞こえるかした、と耳を澄ましてみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のと

ころに行^いって、お嬢^{じょう}さん^{はな}の話^{はな}しかけてる相手^{あいて}が誰^{だれ}なのか、見てみようと思^{おも}いました。
窓^{まど}から顔^{かお}を出^だして上^{うへ}を見^みましたら、なんと、つばめが、教室^{きょうしつ}の屋根^{やね}の下^{した}に、巣^すを作^{つく}
ているんです。その、つばめに聞^きいてるんですね。そりゃ私^{わたし}も、子供^{こども}の気持^{きもち}ちが、分^わ
からないわけじゃありませんから、つばめに聞^きいてることを、馬鹿^{ばか}げている、とは申し
ません。授業^{じゅぎょう}中^{ちゅう}に、あんな声^{こえ}で、つばめに、『何^{なに}をしてるのか?』と聞^きかなくてもいい
と、私^{わたし}は思^{おも}うんです」そして先生^{せんせい}は、ママが、一体^{いったい}なんとお詫^わびをしよう、と口^{くち}を
開^あきかけたのより、早^{はや}く言^いった。「それから、こういうことも、ございました。初^{はじ}めて
の図画^{ずが}の時間^{じかん}のことですが、国旗^{こっき}を描^{えが}いて御覧^{ごらん}なさい、と私^{わたし}が申しましたら、他の子^{ほかこ}
は、画用紙^{がようし}に、ちゃんと日^ひの丸^{まる}を描^{えが}いたんですが、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、朝日新聞^{あさひしんぶん}の
模様^{もよう}のような、軍艦旗^{ぐんかんき}を描^{えが}き始めました。それなら、それでいい、と思^{おも}ってましたら、
突然^{とつぜん}、旗^{はた}の周^{まわ}りに、ふさを、つけ始め^{はじ}めたんです。ふさ。よく青年団^{せいねんだん}とか、そういった
旗^{はた}についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見た^みのだろうから、と
思^{おも}っておりました。ところが、ちょっ^めと目^めを離^{はな}したキスに、まあ、黄色^{きいろ}のふさを、机^{つくえ}に
まで、どん^{えが}どん描^{えが}いちゃってるんです。だいたい画用紙^{がようし}に、ほぼいっばいに旗^{はた}を描^{えが}いた
んですから、ふさの余裕^{よゆう}は、もともと、あまりなかつたんですが、それに、黄色^{きいろ}のクレ
ヨンで、ゴシゴシふさを描^{えが}いたんですね。それが、はみ出^だしちゃって、画用紙^{がようし}をどかし
たら、机^{つくえ}に、ひどい黄色^{きいろ}のギザギザが^{のこ}残^{のこ}ってしま^{のこ}って、ふいても、こすっても、とれま
せん。まあ、幸^{さいわ}いなことは、ギザギザが三方向^{さんほう}だけだった、ってことでしょうか？」マ
マは、ちぢこまりながらも、急^{いそ}いで質^{しつもん}問^{もん}した。「三方向^{さんほう}っていうのは……」先生^{せんせい}は、そ
ろそろ疲^{つか}れてきた、という様子^{ようす}だったが、それでも親^{しんせつ}切^{せつ}にい^はった。「旗竿^{はたざお}を左^{ひだり}は^はじに
描^{えが}きましたから、旗^{はた}のギザギザは、三方向^{さんほう}だけだったんでござい^{すこ}ます」ママは、少し助^{たす}
かった、と思^{おも}って、「はあ、それで三方向^{さんほう}だけ……」とい^{せんせい}った。すると、先生^{せんせい}は、次^{つぎ}に、
と^{くちよう}っても、ゆ^{ひとこと}っくりの口調^{くちよう}で、一^く言^ぎずつ区切^かって「た^{はたざお}だし、その代^かわり、旗竿^{はたざお}のは^はじ
が、やはり、机^{つくえ}に、は^だみ出^{のこ}して、残^{のこ}っております!!」それから先生^{せんせい}は立^たち上^あがると、か
なり冷^{つめ}たい感^{かん}じで、とどめをさ^いすように言^{めい}った。「それと、迷^{めい}惑^{わく}しているのは、私^{わたし}だけ
ではござい^{となり}ません。隣^いの一年生^{いちねんせい}の受^うけ持^もちの先生^{せんせい}もお困^{こま}りのことが、あるそうですか
ら……」ママは、決^{けっしん}心^{しん}しないわけには、い^{たし}かなかつた。(確^{ほか}かに、これ^{せい}じゃ、他の生徒^{せいと})

さんに、ご迷惑^{めいわく}すぎる。どこか、他の学校^{ほかに がっこう さが}を探して、移^{うつ}したほうが、よさそうだ。何とか、あの子^この性格^{せいかく}がわかっていただけで、皆^{みな}と一緒^{いっしょ}にやっ^{おし}ていくことを教えてくださるような学校^{がっこう}に……) そうして、ママが、あっちこっち、かけずりまわって見^みつけたのが、これから行^いこうとしている学校^{がっこう}、というわけだったのだ。ママは、この退学^{たいがく}のことを、トットちゃんに話^{はな}していなかった。話^{はな}しても、何^{なに}がいけなかったのか、わからないだろうし、また、そんなにことで、トットちゃんが、コンプレックスを持^もつのも、よくないと思^{おも}ったから、(いつか、大き^{おお}くなったら、話^{はな}しましょう) と、きめていた。ただ、トットちゃんには、こうい^いった。「新^{あた}しい学校^{がっこう}に行^いってみない? いい学校^{がっこう}だって話^{はなし}よ」トットちゃんは、少し考^{すこ}えてから、言^いった。「行くけど……」ママは、(この子^こは、今何^{いまなに}を考^{かんが}えてるのだろうか) と思^{おも}った。(うすうす、退学^{たいがく}のこと、気^きがついていたんだろうか……) 次^{つぎ}の瞬^{しゅん}間^{かん}、トットちゃんは、ママの腕^{うで}の中^{なか}に、飛^とび込^こんで来^きて、い^いった。「ねえ、今度^{こんど}の学校^{がっこう}に、いいチンドン屋^やさん、来^くるかな?」とにかく、そんなわけ^{わけ}で、トットちゃん^{あたら}とママは、新^{あた}しい学校^{がっこう}に向^むかって、歩^{ある}いているのだった。

Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止った。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。

「きっと、どんだんはえて、今に電信柱より高くなるわ」

確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。

「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！

「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」

それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

Chapter4 気に入ったわ

次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声を上げると、電車の教室のほうに向かって走り出した。そして、走りながら、ママに向かって叫んだ。

「ねえ、早く、動かない電車に乗ってみよう!」

ママは、驚いて走り出した。もとバスケットボールの選手だったママの足は、トットちゃんより速かったから、トットちゃんが、後、ちょっとでドア、というときに、スカートを捕まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎっちり握ったまま、トットちゃんにいった。

「ダメよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入れていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車に乗りたかったら、これからお目にかかる校長先生とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通えるんだから、分かった?」

トットちゃんは、（今乗れないのは、とても残念なことだ）と思ったけど、ママのいう通りにしようときめたから、大きな声で、

「うん」

といって、それから、いそいで、つけたした。

「私、この学校、とっても気に入ったわ」

ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうかが問題なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、手をつないで校長室のほうに歩き出した。

どの電車も静かで、ちょっと前に、一時間目の授業が始まったようだった。あまり広くない校庭の周りには、塀の変わりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。

校長室は、電車ではなく、ちょうど、門から正面に見える扇形に広がった七段くらいある石の階段を上った、その右手にあった。

トットちゃんは、ママの手を振り切ると、階段を駆け上がって行ったが、急に止まっ

て、振り向いた。だから、後ろから行ったママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これからあいに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。

「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

Chapter5 校長先生

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子から立ち上がった。その人は、頭の毛が薄くなっていて、前のほうの歯が抜けていて、顔の血色がよく、背はあまり高くないけど、肩や腕が、がっちりしていて、ヨレヨレの黒の三つ揃いを、キチンと着ていた。トットちゃんは、急いで、お辞儀をしてから、元気よく聞いた。「校長先生か、駅の人か、どっち?」「校長先生だよ」トットちゃんは、とってもうれしそうに言った。「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校にいたい」校長先生は、椅子をトットちゃんに勧めると、ママのほうを向いて言った。「じゃ、僕は、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰り下さって結構です」ほんのちょっとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、(この校長先生ならいいや)と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。「じゃ、よろしく、お願いします」そして、ドアを閉めて出て行った。校長先生は、トットちゃんの前に椅子を引っ張ってきて、とても近い位置に、向かい合わせに腰をかけると、こういった。「さあ、何でも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」「話したいこと!?(なにか聞かれて、お返事するのかな?)」と思っていたトットちゃんは、「何でも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話し方も、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。今乗ってきた電車が速かったこと。

駅の改札口のおじさんに、お願いしたけど、切符をくれなかったこと。前に行っていた学校の受け持ちの女の先生は、顔がきれいだということ。その学校には、つばめの巣があること。家には、ロッキーという茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、ご飯の後で、“満足、満足”ができること。幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、チョキチョキやると、「舌を切ります」と先生が怒ったけど、何回もやっちゃったということ。涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやっていると、ママにしかられるから、なるべく早くかむこと。パパは、海で泳ぐのが上手で、飛び込みだってできること。こういったことを、次から次と、トットちゃんは話した。先生は、笑ったり、うなずいたり、「これから?」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トッ

トットちゃんは、いつまでも話した。でも、とうとう、話がなくなった。トットちゃんは、口をつぐんで考えていると、先生はいった。「もう、ないかい？」トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、残念だと思った。せっかく、話を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。(なにか、話は、ないかなあ……) 頭の中が、忙しく動いた。と思ったら、「よかった!」。話が見つかった。それは、その日、トットちゃんが着てる洋服のことだった。たいがいの洋服は、ママが手製で作ってくれるのだけれど、今日のは、買ったものだった。というのも、なにしろトットちゃんが夕方、外から帰ってきたとき、どの洋服もビリビリで、ときには、ジャキジャキのときもあったし、どうしてそうなるのか、ママにも絶対わからないのだけれど、白い木綿でゴム入りのパンツまで、ビリビリになっているのだから。トットちゃんの話によると、よその家の庭をつきって垣根をもぐったり、原っぱの鉄条網をくぐるとき、「こんなになっちゃうんだ」ということなのだけれど、とにかく、そんな具合で、結局、今朝、家をでるとき、ママの手製の、しゃれたのは、どれもビリビリで、仕方なく、前に買ったのを着てきたのだった。それはワンピースで、エンジとグレーの細かいチェックで、布地はジャージだから、悪くはないけど、衿にしてある、花の刺繍の、赤い色が、ママは、「趣味が悪い」といっていた。そのことを、トットちゃんは、思い出したのだった。だから、急いで椅子から降りると、衿を手で持ち上げて、先生のそばに行き、こういった。「この衿ね、ママ、嫌いなんだって!」

それをいってしまったら、どう考えてみても、本当に、話しはもう無くなった。トットちゃんは(少し悲しい)と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きく暖かい手を置くと、「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」そういった。……その時、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人にあったような気がした。だって、生まれてから今日まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかたんだもの。そして、その長い時間の間、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身を乗り出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、

とおも
と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。そして、もっと
先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃんとママが学校に着いたのが八時
で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と
き
決まったとき、先生が懐中時計を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つ
まり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話^{はなし}を聞いてくれたことになるのだっ
た。後にも先にも、トットちゃんの話^{はなし}を、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、い
なかった。それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間
も、一人でしゃべるぶんの話^{はなし}しがあったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、
き
きっと、ビックリするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学^{たいがく}のことはもちろん、周りの大人が、手こずっ
てることも、気がついていなかったし、もともと性格^{せいかく}も陽気^{ようき}で、忘れっぽいタチだった
から、無邪気^{むじゃき}に見えた。でも、トットちゃんの中のどこかに、なんとなく、疎外感^{そがいかん}のよ
うな、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなもの
を、おぼろげには感じていた。それが、この校長先生^{こうちょう}といると、安心^{あんしん}で、暖かくて、
き
気持ち^{きもち}がよかった。(この人となら、ずーっと一緒にいてもいい)これが、校長先生^{こうちょう}、
こばやしそうさくし^{こばやしそうさくし}、はじ^{はじ}あ^あ、トットちゃん^{かん}が感じた、感想^{かんそう}だった。そして、有難
いことに、校長先生^{こうちょう}も、トットちゃんと、同じ感想^{おなかんそう}を、その時^{とき}、持っていたのだった。

Chapter6 お弁当

トットちゃんは、校 長 先生に連れられて、みんなが、お弁当を食べるところを、見に行くことになった。お昼だけは、電 車 でなく、「みんな、講 堂 に集まることになっている」と校 長 先生が教えてくれた。講 堂 はさっきトットちゃんが上がってきた石の階 段 の、突き当たりにあった。いってみると、生徒たちが、大騒ぎをしながら、机 と椅子を、講 堂 に、まーるく輪になるように、並べているところだった。隅っこで、それを見ていたトットちゃんは、校 長 先生の上着を引っ張って聞いた。「他の生徒は、どこにいるの？」

「みなさま、行ってまいります」

見送りに立っていたママは、ちょっと涙 でそうになった。それは、こんなに生き生きとしてお行儀よく、素直で、楽しそうにしてるトットちゃんが、つい、このあいだ、「退学になった」、ということを思い出したからだった。(新しい学校で、うまくいくといい……) ママは心 からそう祈った。

ところが、次の瞬間、ママは、飛び上がるほど驚いた。というのは、トットちゃんが、せっかくママが首からかけた定期を、ロッキーの首にかけているのを見たからだ。ママは、(一体どうなるのだろう?) と思ったけど、だまって、成り行きを見ることにした。トットちゃんは、定期をロッキーの首にかけると、しゃがんで、ロッキーに、こういった。

「いい?この定期のヒモは、あんたに、合わないのよ」

確かに、ロッキーにはヒモが長く、定期は地面を引きずっていた。

「わかった? これは私 の定期で、あんたのじゃないから、あんたは電 車 に乗れないの。校 長 先生に聞いてみるけど、駅の人にも。で『いい』っていったら、あんたも学校に来られるんだけど、どうかなあ」

ロッキーは、途中までは、耳をピンと立てて神 妙 に聞いていたけど、説明の終わりのところで、定期を、ちょっと、なめてみて、それから、あくびをした。それでも、トットちゃんは、一生懸命に話し続けた。

「電車の教室は、動かないから、お教室では、定期はいらないと思うんだ。とにかく、今日は持ってるのよ」

たしかにロッキーは、今まで、歩いて通う学校の門まで、毎日、トットちゃんと一緒に行って、後は、一人で家に帰ってきていたから、今日も、そのつもりでいた。

トットちゃんは、定期をロッキーの首からはずすと、大切そうに自分の首にかけると、パパとママに、もう一度、『行ってまいりまーす』という、今度は振り返らずに、ランドセルをカタカタいわせて走り出した。ロッキーも、からだをのびのびさせながら、並んで走り出した。

校長先生は答えた。「これで全部なんだよ」「全部!？」トットちゃんは、信じられない気がした。だって、前の学校の一クラスと同じくらいしか、いないんだもの。そうすると、「学校中で、五十人くらいなの?」校長先生は、「そうだ」といった。トットちゃんは、なにもかも、前の学校と違ってると思った。

駅までの道は、前の学校に行く道と、ほとんど変わらなかった。だから、途中でトットちゃんは、顔見知りの犬や猫や、前の同級生と、すれ違った。トットちゃんは、その度に、「定期を見せて、驚かせてやろうかな?」と思ったけど、(もし遅くなったら大変だから、今日は、よそう……)と決めて、どんどん歩いた。

駅のところに来て、いつもなら左に行くトットちゃんが、右に曲がったので、可哀そうにロッキーは、とても心配そうに立ち止って、キョロキョロした。トットちゃんは、改札口のところまで行ったんだけど、戻ってきて、まだ不思議そうな顔をしてるロッキーにいった。

「もう、前の学校には行かないのよ。新しい学校に行くんだから」

それからトットちゃんは、ロッキーの顔に、自分の顔をくっつけ、ついでにロッキーの耳の中の、においをかいだ。(いつもと同じくらい、くさいけれど、私には、いい、におい!) そう思うと顔を離して、「バイバイ」というと、定期を駅の人に見せて、ちょっと高い駅の階段を、登り始めた。ロッキーは、小さい声で鳴いて、トットちゃんが階段を上っていくのを、いつまでも見送っていた。

みんなが着席すると、校長先生は、「みんな、海のもの、山のもの、もって

来たかい?」と聞いた。「はい」みんな、それぞれの、お弁当の、ふたを取った。「どれどれ」校長先生は、机で出来た円の中に入ると、ひとりずる、お弁当をのぞきながら、歩いている。

生徒たちは、笑ったり、キイキイいたり、にぎやかだった。

「海のものと、山のもの、って、なんだろう」

トットちゃんは、おかしくなった。でも、とっても、とっても、この学校は変わっていて、面白そう。お弁当の時間が、こんなに、愉快で、楽しいなんて、知らなかった。トットちゃんは、明日からは、自分も、あの机に座って、『海のものと、山のもの』の弁当を、校長先生に見てもらうんだ、と思うと、もう、嬉しさと、楽しさで、胸がいっぱいになり、叫びそうになった。お弁当を、のぞきこんでる校長先生の肩に、お昼の光が、やわらかく止まっていた。

きのう、「今日から、君は、もう、この学校の生徒だよ」、そう校長先生に言われたトットちゃんにとって、こんなに次の日が待ち遠しい、ってことは、今までになかった。だから、いつもなら朝、ママが叩き起こしても、まだベッドの上でぼんやりしてることの多いトットちゃんが、この日ばかりは、誰からも起こされない前に、もうソックスまではいて、ランドセルを背負って、みんなの起きるのを待っていた。

この家の中で、いちばん、きちんと時間を守るシェパードのロッキーは、トットちゃんの、いつもと違う行動に、怪訝そうな目に向けながら、それでも、大きく伸びをすると、トットちゃんにぴったりとくっついて、(何か始まるらしい)ことを期待した。

ママ大変だった。大忙しで、『海のものと山のもの』のお弁当を作り、トットちゃんに朝ごはんを食べさせ、毛糸で編んだヒモを通した、セルロイドの定期入れを、トットちゃんの首にかけた。これは定期を、なくさないためだった、パパは「いい子でね」と頭をヒシャヒシャにしたまま言った。「もちろん!」と、トットちゃんは言う、玄関で靴を履き、戸を開けると、クルリと家の中を向き、丁寧に辞儀をして、こういった。

Chapter7 今日から学校に行く

きのう、「^{きょう}今日から、^{きみ}君は、もう、この学校の^{せいと}生徒だよ」、そう校^{こう}長^{ちやう}先生^いに言われたトットちゃんにとって、こんなに^{つぎ}次の日^まが^{どお}待ち遠しい、ってことは、^{いま}今までになかった。だから、いつもなら朝、ママが^{あさ}叩^{たた}き起^おこしても、まだベッドの上でぼんやりしてることの多いトットちゃんが、この日ばかりは、^{だれ}誰^おからも起^おこされない^{まえ}前に、もうソックスまではいて、ランドセルを^し背負^よって、みんなの^お起き^まるのを待っていた。

ロッキーは、^{とちゅう}途中までは、耳をピンと立てて^{しんみょう}神^き妙^きに聞^きいていたけど、^{せつめい}説明^おの^お終わりのところで、^{ていき}定期^いを、ちょっと、なめてみて、それから、あくびをした。それでも、トットちゃんは、^{いっしょうけんめい}一生懸命^{はな}に^{つづ}話^わし続^{つづ}けた。

「^{でんしゃ}電^{きやうしつ}車^{うご}の教^{きやうしつ}室^{ていき}は、動^{おも}かないから、お教^{きやうしつ}室^{ていき}では、定期^{おも}はいらないと思うんだ。とにかく、^{きょう}今日^もは持^もってるのよ」

たしかにロッキーは、^{いま}今^{ある}まで、^{かよ}歩^{もん}いて通^{まいにち}う学校^{もん}の門^{まいにち}まで、毎日、トットちゃんと^{いっしょ}一緒^いに行^いって、^{あと}後^{ひとり}は、^{いえ}一^{かえ}人で家^{きやう}に帰^{きやう}ってきていたから、^{きやう}今日^{きやう}も、そのつもりでいた。

トットちゃんは、^{ていき}定期^{くび}をロッキーの首^{くび}からはずすと、^{たいせつ}大切^{じぶん}そう^{くび}に自^{くび}分の首^{くび}にかけると、パパとママに、もう^{いちど}一度^い、『行^いってまいりまーす』という^{こんど}と、^ふ今^{かえ}度は振^{かえ}り返^{かえ}らずに、ランドセルをカタカタい^{はし}わ^だせて走^{はし}り出^だした。ロッキーも、からだをのびのびさせながら、^{なら}並^{はし}んで走^だり出^だした。

^{えき}駅^{みち}までの道^{まえ}は、^い前^{みち}の学校^いに行^いく道^{みち}と、ほとんど^か変^かわらなかつた。だから、^{とちゅう}途中^{とちゅう}でトットちゃんは、^{かおみし}顔^{ねこ}見^{まえ}知^{どうきやう}りの犬^{ちが}や猫^{ちが}や、^{ちが}前^{ちが}の同^{ちが}級^{ちが}生^{ちが}と、すれ違^{ちが}った。トットちゃんは、その^{たび}度^{ていき}に、「定期^{おどろ}を見^{おどろ}せて、驚^{おも}かせてやろうかな?」と思^{おも}ったけど、(もし^{おそ}遅^{おそ}くなったら^{たいへん}大変^{きやう}だから、^き今日^{ある}は、よそう……)と決^きめて、^{ある}ど^{ある}ん^{ある}ど^{ある}ん歩^{ある}いた。

^{えき}駅^きの^きところ^きに^き来^いて、いつもなら左^いに行^いくトットちゃんが、右^まに曲^まがったので、^{かわい}可^{かわい}哀^{かわい}そう^{かわい}にロッキーは、とても^{しんぱい}心^{しんぱい}配^{しんぱい}そう^{しんぱい}に立^たち止^{どま}って、^{しんぱい}キョロ^{しんぱい}キョロ^{しんぱい}した。トットちゃんは、^{かいさつぐち}改^{かい}札^{かい}口^{かい}の^いところ^いまで行^いった^{もど}んだ^{もど}けど、^{もど}戻^{もど}って^{もど}来^{もど}て、^ふま^ふだ^ふ不^ふ思^ふ議^ふそう^ふな^ふ顔^ふを^{かお}し^{かお}てる^{かお}ロッキー^{かお}に^{かお}い^{かお}った。

「もう、^{まえ}前^いの学校^いには行^いかないのよ。^{あた}新^{あた}しい^{あた}学校^{あた}に行^{あた}く^{あた}んだ^{あた}から」

それからトットちゃんは、ロッキーの顔に、自分の顔をくっつけ、ついでにロッキーの耳の中の、においをかいだ。(いつもと同じくらい、くさいけれど、私には、いい、におい!) そう思うと顔を離して、「バイバイ」というと、定期を駅の人に見せて、ちょっと高い駅の階段を、登り始めた。ロッキーは、小さい声で鳴いて、トットちゃんが階段を上っていくのを、いつまでも見送っていた。

この家の中で、いちばん、きちんと時間を守るシェパードのロッキーは、トットちゃんの、いつもと違う行動に、怪訝そうな目を向けながら、それでも、大きく伸びをすると、トットちゃんにぴったりとくっついて、(何か始まるらしい) ことを期待した。

ママ大変だった。大忙しで、『海のものと山のもの』のお弁当を作り、トットちゃんに朝ごはんを食べさせ、毛糸で編んだヒモを通した、セルロイドの定期入れを、トットちゃんの首にかけた。これは定期を、なくさないためだった、パパは「いい子でね」と頭をヒシャヒシャにしたまま言った。「もちろん!」と、トットちゃんは言う、玄関で靴を履き、戸を開けると、クルリと家の中を向き、丁寧に辞儀をして、こういった。

「みなさま、行ってまいります」

見送りに立っていたママは、ちょっと涙でそうになった。それは、こんなに生き生きとしてお行儀よく、素直で、楽しそうにしてるトットちゃんが、つい、このあいだ、「退学になった」、ということを思い出したからだった。(新しい学校で、うまくいくといい……) ママは心からそう祈った。

ところが、次の瞬間、ママは、飛び上がるほど驚いた。というのは、トットちゃんが、せっかくママが首からかけた定期を、ロッキーの首にかけているのを見たからだった。ママは、(一体どうなるのだろう?) と思ったけど、だまって、成り行きを見ることにした。トットちゃんは、定期をロッキーの首にかけると、しゃがんで、ロッキーに、こういった。

「いい? この定期のヒモは、あんたに、合わないのよ」

確かに、ロッキーにはヒモが長く、定期は地面を引きずっていた。

「わかった? これは私の定期で、あんたのじゃないから、あんたは電車に乗れないの。校長先生に聞いてみるけど、駅の人にも。で『いい』っていったら、あんたも

学校に^こ来られるんだけど、どうかなあ」